
ヘッドフォン・エフェクト

マサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘッドフォン・エフェクト

【Nコード】

N6021Z

【作者名】

マサ

【あらすじ】

2200年を越えた年

地球に一つの隕石が落ちた。それは野球ボール程の大きさだったらしい。

2210を越えた頃。

人類は滅亡の危機に襲われた。見たこともない化物によって、

未来地球

バババと硝煙に包まれた場所に数人の迷彩柄の服を着た兵士が、武器を構えて物陰に隠れていた。

みなが憔悴しきっており、その先には体長2メートルを越える鉋物で出来た体を動かした化物がいた。

何処かの住居の骨格柱が体に刺さっているような歪な形で、どこに視界となる人間の眼のような部分が存在しているのか、聴覚があるのかすら不安なその物体は伝説に例えるならゴーレムと言った所であろうか。一人が我を忘れて、両手に抱えた銃器の引き金を引いたまま、そのゴーレムに突っ込んでいく。

「うおおおおおおおおおー！ー！ー！ー！！！！！」

大きな雄叫びを上げて自分のモチベーションを上げて、突撃するその有志に隠れていた仲間が息を呑んで、見つめている。ーが、結果はとても簡素で、簡単だった。物凄いスピードで放たれる銃弾はゴーレムに傷一つ与えずに、ゴーレムの攻撃範囲に入ってしまった兵士は腕を軽々振っただけで、数メートル吹き飛んで、壁に叩きつけられてしまった。

その速度は、まるでダンブカーに轢かれたように激しく、他者から見ても、死んだ事が理解できる程の力だった。

すぐに物陰に隠れて、思わず一人の兵士が本音を漏らした。

「・・・あんな化物に勝てる訳ねえよ・・・」

ヘルメットがずり下がって、表情すら読めないその兵士にみなも沈黙し、うつむいた。胸に装備したトランシーバーから、違う場所でゴーレムと戦闘している部隊の通信が絶え間なくコールしている。

だが、その通信すらもう手に取るのが、拒否していた。

ポイントB、ポイントAとは違いここは、ビルが立ち並んでいる道路で車を楯にして、銃撃戦が続いていた。無数の銃弾の雨を弾き、少しずつ防衛網へと距離を縮めるゴーレムに防衛網を少しずつ後退させながら、対応する。ここはAポイントとは違い、まだ戦意は残っていた。それは先程まで交戦していた違う1体のゴーレムを倒す事が出来たからだ。最後の一発に用意されたRPG-7でゴーレムを粉々に吹き飛ばしたのだ。

RPG-7の無い現在でも、勝機が見えた兵士達が息が衰える事なく、隊長の喝と共に戦闘を続けていた。

「後退しろッ！絶対に弱点はあるはずだッ！！」

硝煙の煙と火薬の匂いを充満させ、ポイントBは健在だった。

ポイントC。三方向からの守備の最後のポイントは、壊滅していた。3体のゴーレムを相手に兵士は全滅し、残るのは一人となった。物陰に隠れて、嗚咽を我慢し、体をプルプルと震わせて、過呼吸にまで陥るほどの状態だった。

ゴーレムは、その兵士に見向きとせず防衛の先の居住区を狙って歩き出す。

トランシーバーで他の兵士に伝えなければいけない状況下で、その兵士の手元にはトランシーバーはなく、物陰から数メートルの場所で地面に俯せて倒れたまま動かない兵士のトランシーバーを借りな

くてはいけない。だが、兵士は動く事が出来なかった。

ーポイントA

「あのままでは、居住区に被害は出る！ここは俺が時間を稼ぐ」

と物陰から出ようとした兵士の肩に手が置かれた。手に指先が無いグローブをはめた、Tシャツにジーパンというカジュアルな服装の赤髪の女性が、ニコツと笑っていた。

「お疲れ様、あとは俺に任せときなッ！」

「・・・お、お前は・・・」

皆が隠れている物陰から堂々と、ゴーレムに向かって歩いていく女性性は、手をポキポキと鳴らしながら、歩いていく。

「さて、今日の晩御飯のさんまは頂いたなッ！」

ーポイントB

後退していくもそろそろ最終防衛地点レッドラインを越えはじめ、焦りの色が現れる。

と、その時ー、ゴーレムが近くにあった瓦礫に埋もれた鉄クズを腕に吸収して、大きく振り回し、鉄屑を兵士に向かって飛ばした。

「ッ！？、たいー」

隊長が動揺から遅れて、退避命令を叫ぼうとした時には目の前まで巨大な鉄くずは近づいていた。

隊長が思わず目を瞑って、衝撃に備えるもいつまで経ってもこない衝撃にゆっくりと目を開くとそこには数体の洋風人形がその鉄くずを受け止めていた。力を失って地面に落ちる鉄くずに人形たちは魔方陣から武装を開始する。背丈以上の大剣を握り締め、その身も鎧を装着する。

「――全く、僕は力仕事は嫌いなんだよ」

140cm弱の身長小さな男の子が、隊長の横を通り抜けて、人形たちに命令する。

「――攻撃開始」

――ポイントC

今だ震える兵士は、自分に言い聞かせて息を落ち着かせようとしていた。だが、そんな兵士に一人の男が話しかけていた。

「なあ、なんか食えるもん持ってねえか？」

「えっ!？」

「朝飯、食ってねえから腹が減って動けねえんだ」

「あ、あの・・・ここは、防衛地区で民間人は・・・」

「――いいから食い物持つてるのか、持ってねえのか答えるッ!」

「あ、妹から作ってもらったオニギリなら」

「それでいい、寄越せッ!」

兵士は驚きながらも、いつの間にか自分の近くで座っていたその男にポケットに入れ包装紙でくるんだオニギリを渡すと、男はむしゃむしゃとかぶりつき、米粒一つ残さず完食した。

「塩辛えな・・・」

「・・・」

「だが、美味かった」

と言い残して、ゴーレムに向かって歩み出した。

腰に挿した刀に手を掛けて、3体のゴーレムに向かって走りだした。

「飯分は働いてやるぜえ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6021z/>

ヘッドフォン・エフェクト

2011年12月20日00時45分発行